

大石寺漫荼羅本尊の真偽について

―所謂「本門戒壇の大御本尊」の凶形から見た鑑別

(宗教研究家) 犀角独歩

本稿は、平成十六年十月二十五日の、日蓮宗現代宗教研究所「現代社会プロジェクト会議」でのミニ講演を元に、講師自身が構文したものです。



図001

■自己紹介
皆さん、初めまして。犀角独歩でございます。

わたしは昭和三十年の生まれでございます。生まれながらの創価学会、三十五歳の時に日蓮正宗と創価学会の、所謂、第二次紛争の段階で創価学会を脱会いたしました。その後、大石寺の末寺である大田区宝浄寺に所属してあります。その間、大石寺宗務院内事

部『大日蓮』編集室、ならびに教学部の仕事をしております。

四十歳の時に、阪神淡路大震災、オウム真理教地下鉄サリン事件を見、日蓮正宗からも、自主的に役を降りました。

その後、日本脱カルト研究会（JDCC）に入りました。ここで『日本脱カルト研究会報』の編集に従事しておりました。同団体は平成十六年四月に名称を変更し、現在は日本脱カルト協会（JSCPR）といいます。

また、ここ五年間ぐらひは日蓮宗社会福祉法人・立正福祉会青少年こころの相談室本部相談員を務めてまいりました。ここで日蓮本仏論、もしくは彫刻本尊信仰圏の、主に家族問題を扱ってまいりました。

本日は、過去数年、インターネットの『富士門流信徒の掲示板』での活発な議論で辿り着いた自分なりの結論を申し上げます。

■言葉の定義

はじめに、言葉の用法について申し上げます。

「大石寺漫茶羅の真偽について―所謂『本門戒壇の大御本尊』の図形から見た鑑別」という表題のそれぞれの語彙について、定義といえは大袈裟ですが、当発表における言葉の使い方の決まりです。

〔大石寺漫茶羅〕 写真（図01）は熊田葦城著『日蓮上人』（報知社）に載ったものです。

中央題目・日蓮花押・不動愛染・四大天玉（へんろう）のおよそ相貌（へそうみょう）は確認することができます。

該当の彫刻を、一般には「板マンガラ」、あるいは「板本尊」などと呼称しますが、大石寺六六代細井日達（へにつたつ）氏は

「戒壇の御本尊様は楠の厚木です。表から見ると…板です。ところが此れは大変な板です。ただの板ではないのです。…後ろから見ると丸木です。丸木を表だけ削ってあるわけです。…上はただ三寸そこそこの板ですけれども、ま

わりは丸木です。真ん丸い木です。その丸い木を前を削って板にしたにすぎません」（『日達上人全集二輯五卷』（四六頁）

と言い、その形状を丸木の表面を削り、板面に彫刻を施したものと明言しました。となれば、これを単に「板」と言えば、その形状を正確に表したことになります。

「大石寺漫茶羅」とは、より正確を期せば、「大石寺所蔵の丸木板彫刻漫茶羅本尊」とでもすべきかも知れませんが、冗長になります。大石寺彫刻本尊と、仮に呼称することにいたします。

「大漫茶羅」 「マングラ」は通常、「曼陀羅」等の漢字を用いることが一般的ですが、該当のマングラの『讚文（さんもん）』は「大漫茶羅」となっていますので、それに準じました。なお、日蓮聖人の御筆大漫茶羅のみを「大漫茶羅」と呼称し、真偽未決分は、単に「漫茶羅」、それを基にした書写、もしくは彫刻その他は「本尊」と呼び、これを区別しました。

「本門戒壇の大御本尊」 この呼称は大石寺二六代日寛（にちかん）が、その著『六卷抄』のなかで用いたものです。ここでは、そのような特定信念体系のみの用語を使わずに、大石寺彫刻本尊といたしました。

〔鑑別〕 鑑定ではなく、あえて鑑別の言葉を用いました。

鑑別とは、辞書によれば「物事を鑑定して判別すること」となっています。たとえば宝石を鑑みる場合、その品質からランクを見極めることを鑑定といい、その真贋を見極めることを鑑別と言います。

当発表は大石寺彫刻本尊の価値を評価することを目的とするのではなく、真贋を問うことを意図しますので、鑑定ではなく「鑑別」の語を用いました。

■発表の目的

彫刻本尊の真偽については、わたしがここに繰り返すまでもなく、『久遠述記』『大石寺誑惑蹟本（おうわくけんぼん）書』、また、『興尊雪冤（こうそんせつえん）録』をはじめとして、多くの書籍で、種々語られてきました。その詳細については、個人的には考証を存する箇所も少なからずあります。しかし、本日は、これら文献証拠に基づく真偽論は、さておきます。大石寺彫刻本尊の文字、すなわち、その相貌から、この彫刻が如何なるものであるのか考へることを目的にするからです。

「大石寺漫茶羅の真偽」、つまり大石寺が所蔵する彫刻本尊の真偽ということですが、誤解を避けるために、もう少し正確に定義します。そもそも、日蓮聖人の御筆大漫茶羅、これはもちろん、紙幅です。けれども、その御筆を原本にして、彫刻すれば、それは文字通り彫刻です。彫刻である以上、真筆かどうかを問うことは意味がありません。わたしが、ここで「真偽」というのは、この彫刻本尊が大石寺が主張する如くのものであるか、否かです。言うとおりであれば「真」、違っていれば「偽」であるという意味です。

■鑑別（比較・検討）の方法

大石寺彫刻本尊は未公開ですので、実地見聞し、また、一々の文字サイズの実寸を計測することはできません。その他の大漫茶羅・本尊についてもそのような調査をすることはできません。また、入手した図は、サイズがまちまちでした。このために、中央題目の「南」から「經」の字までの長さを基準として、縮尺を調整し、同一サイズとして、比較・検討に供しました。これによって、相似形比較の条件は満たされず。

各漫茶羅・本尊の文字の輪郭を取り、大石寺彫刻本尊に重ねて比較検討する方法を採りました。

■板に直接図示という主張

さて、大石寺では、この彫刻本尊につき、どのような主張してきたのでしょうか。

大石寺第五九代堀日亨へにちこう氏は『富士日興上人詳伝』で

「未来勅建国立戒壇建立のために、とくに硬質の楠樹をえらんで、大きく四尺七寸に大聖が書き残されたのがいまの本門戒壇大御本尊」(二七七頁)

であると言います。また、『創価学会の偽造本尊義を破す』という反論書で、

「大石寺の御宝蔵はもちろんのこと、この世のいずこを探しても彼等(創価学会)が言う『紙幅の戒壇の大御本尊』なるものは存在しません」(八九頁)

と明言しております。

要するに、彫刻本尊には紙幅の原本となった御筆大漫荼羅は存在しないと言うのが大石寺の主張です。つまり、このとおりであれば、原本に当たる漫荼羅がなければ「真」、あれば「偽」ということになります。

■第九三妙海寺大漫荼羅との比較

彫刻本尊は板面に直接図示したという大石寺の主張に対して、模刻であるという反駁がなされてきました。

この点について、まず筆頭に挙げられるのは安永弁哲著『板本尊偽作論』でありましょう。このなかで安永氏は、特に「板本尊は妙海寺のマンダラの模作か偽造？」という一項を設けて、

「御本尊集に収録された一二三幅のうち、板本尊によく似ているものは、弘安三年太弋△たいさい▽庚辰五月八日(九三号)の天下泰平国家長久八日堂祈願之大漫荼羅(沼津市妙海寺奉蔵)である」(鹿砦社一四七頁)

と、模写・彫刻説を主張しています。



図002

これに対して細井精道（せいどう）（この大石寺第六代日達）氏は反駁書『悪書板本尊偽作論を粉碎す』（日蓮正宗布教会）のなかで「妙海寺本尊の模作という僻見を破し妙海寺本尊こそ富士所伝本尊の臨写なるを教ゆ」と言つて、妙海寺大漫茶羅（図002）を富士所伝本尊の模写であると断言しました。

これは本題と関係ありませんが、先頃、妙海寺大漫茶羅から、日蓮聖人の指紋・手跡が発見されたことはまだ、記憶に新しいところです。その御筆大漫茶羅を、かつて模写であると断言した大石寺は、いまのところ、前言を翻しておりません。

余談はともかく、安永氏は、妙海寺大漫茶羅による模作を主張したわけでありませぬ。

ここで、安永氏の主張の実否を検討するために、実際に第九三妙海寺大漫茶羅と、大石寺彫刻本尊を比較してみます。

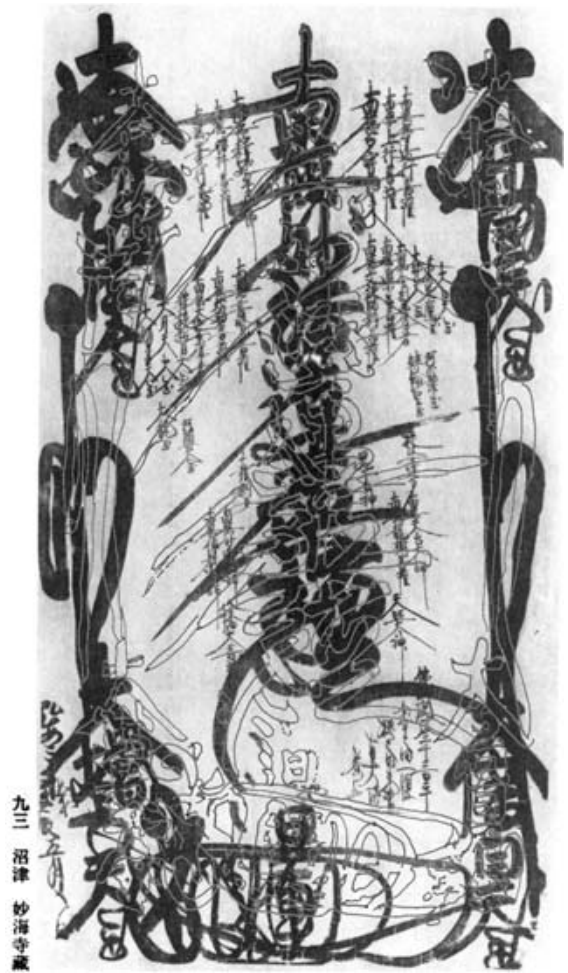


図003

上図のグレーの線は彫刻本尊の輪郭です。重ねてみればわかるとおり、第九三妙海寺大漫茶羅と大石寺彫刻本尊は、よく似てはいるものの、同一の相貌ではないと考えられます。(図003)

■第八二大漫茶羅との比較

木下日順氏は『板本尊偽作の研究』（本門社）のなかで

「板本尊の十界座配と、弘安二年十一月の、俗日増授与の曼茶羅と、サイズがぴたりと

合ったら拍手喝采…紫宸殿本尊の日蓮花押を何故、模写したのか、何故、二つの御真筆を模写して、板本尊にはり合はせて、製作したのか、編者が製作したのではないから勿論わかりません」（四二頁）

と、大石寺に所蔵される二幅の漫茶羅をパッチワークし、彫刻本尊の原本としたと類推しました。

この二幅の漫茶羅のうち、「伝・俗日増授与の漫茶羅」は大石寺の所蔵で、写真その他は公開されておりません。そのために残念ながら、比較することはできません。

もう一幅の紫宸殿本尊ではありますが、この名称はもちろん、大石寺の伝承であり、「讚文」その他とは一切関係ないことはことわるまでもないことです。ただ、「紫宸殿本尊」と呼称し、大石寺門では重要視されてきたことは事実です。この漫茶羅もまた、表向きは公開されておりません。

しかし、大石寺教師・山口範道著『日蓮正宗史の基礎的研究』（山喜房仏書林）に、

「大聖人御本尊現存宝量（大石寺 宝量八 要八・安八二）」（一五一頁）
という記述があります。

また、大石寺五九代堀日亨編『富士宗学要集』（創価学会版）に

「（柴宸殿御本尊と伝称す）弘安三年太才庚辰三月日」
との記載が見られます。

これら記述に基づき『御本尊集』で追うと、まさに第八二漫茶羅と一致します。

この漫茶羅を模刻したと見られる板本尊が大石寺末信行寺に所蔵されています。（図004右）
それに対して、図（004左）が第八二漫茶羅です。

第八二漫茶羅は、立正安国会『御本尊集目録』の備考によると「現在宝蔵 不明」となっております。
一見してわかる通り、第八二漫茶羅こそ、大石寺が言うところの「柴宸殿本尊」であることが知られます。

この花押部分が、大石寺彫刻本尊の花押の原本であるというのが、木下氏の類推です。上が第八二漫茶羅の花押、
下が彫刻本尊の花押です。並べてみますと、一致しません。（図005）

■ 『河邊メモ』

さて、近年、大石寺教師であった河邊慈篤氏が、昭和五十三年に記した一枚のメモがスクープされました。このメモのなかで、大石寺彫刻本尊は日禅授与漫茶羅の模写であると書かれていました。これも一つの「大石寺彫刻本尊模刻説」に数えることにします。

図（006）がそのメモです。

「昭和五三・二・七・A 面談 帝国H（ホテル）」



八二 所藏不詳

图004左



图004右

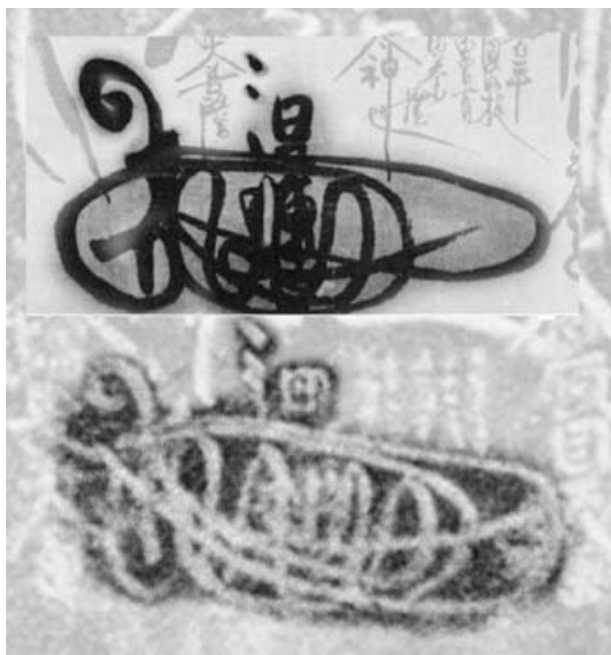


图005

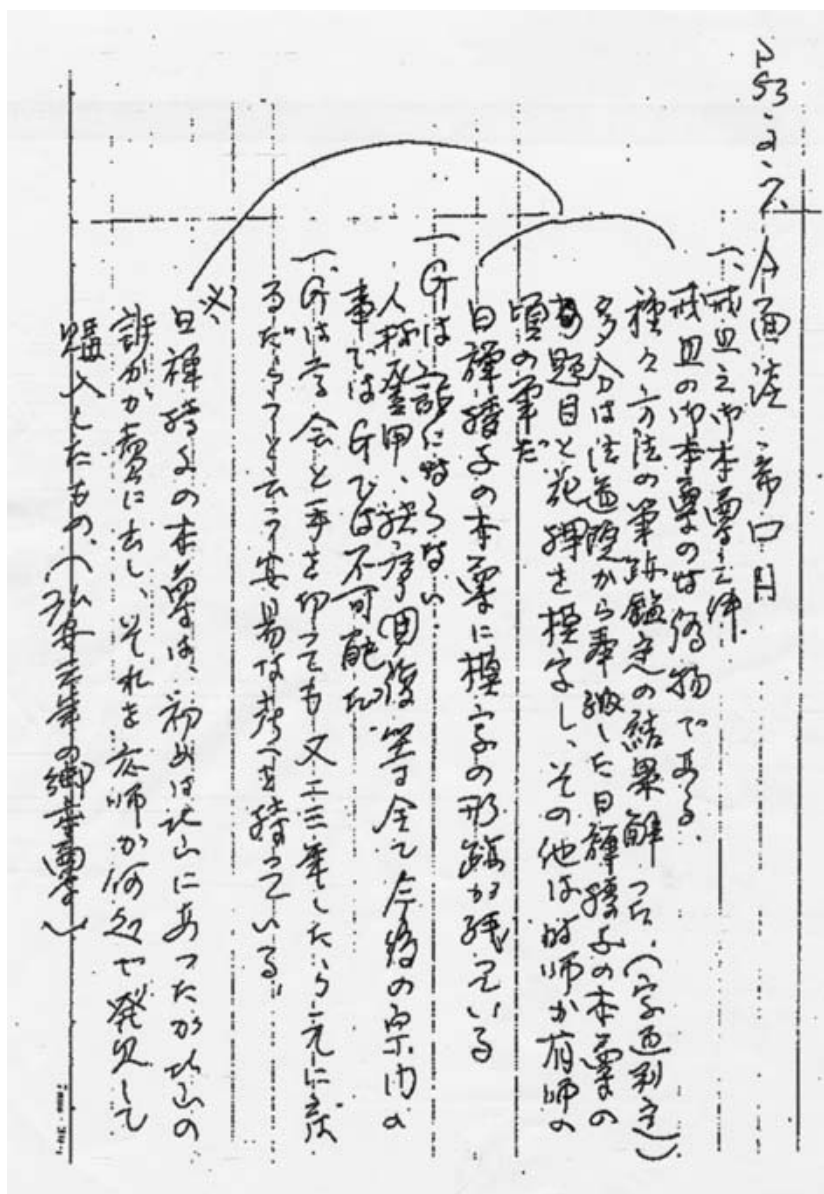


図006

一、戒旦（かいだん）の御本尊の件

戒旦のは偽物である。

種々の方法の筆跡鑑定の結果解った（字画判定）

多分は法道院から奉納した日禅授与の本尊の

お題目と花押を模写し、その他は時師か有師の

頃の筆だ

日禅授与の本尊に模写の形跡が残っている…」

「日禅授与の本尊は、初めは北山にあったが北山の誰かが賣（うり）に出し、それを応師が

何処かで発見して購入したもの（弘安三年の御本尊）」

やや、補足します。

「日禅授与漫茶羅」は、『富士宗学要集』には以下のように載ります。

「弘安三年太歳庚辰五月九日、比丘日禅に之を授与す、（日興上人御加筆右の下部に）少輔公日禅は日興第一の弟子

なり仍て与へ申す所件の如し、(又同御加筆御華押と蓮字と交叉する所に殊更に文字を抹消したる所を判読すれば)本門寺に懸け奉り万年の重宝たるべきものなり。東京 法道院「(九一七八)

これは弘安三年五月九日、すなわち、先の第九三妙海寺大漫茶羅図示翌日の日付が書された漫茶羅であることが知られます。

「日禪」については、北山本門寺に真筆を遺すという日興上人『白蓮弟子分与申御筆御本尊目錄事(へびやくれんでしぶんにあたへもうすおふでごほんぞんもくろくのこと)』の

「駿河国富士方ノ河合少輔公日禪者(へへ)、日興第一ノ弟子也。仍所申与如件」
という記述と、同大漫茶羅の日興上人の加筆は一致します。

「法道院」とは大石寺末東京池袋にある寺院。

「応師」は大石寺第五六代で、明治二十二年(一八八九)から大正十一年(一九二二)まで、その任にありました。関係あるかどうか別として、大石寺彫刻本尊を初めて写真で掲載した熊田葦城著『日蓮上人』の発刊もこの在任期間中のことでした。

「時師」とは日蓮聖人滅八八年後に当たる正平二十四年(一三六九)から聖滅一二四年後の応永十四年(一四〇七)まで任にあった大石寺第六代日時のこと。

「有(へう)師」とは聖滅一三八年後の応永二十六年(一四一九)から聖滅二〇一年後の文明十四年(一四八二)まで任にあった同九代日有のことです。

この『河邊メモ』は、当時教学部長職にあった阿部信雄(へしんおう)(現大石寺六七代日顕(へにつけん))氏が語ったところを、河邊氏がメモしたものであるということ、創価学会は大キャンペーンを張り、それにまた大石寺側も応戦し、広く知れ亘るところとなりました。

メモに記されるところに抛れば、大石寺彫刻本尊は日禅授与漫茶羅の中央題目と花押を模写、その他の部分は、第六代日時、もしくは第九代日有の頃のものを部分模写し、原本として彫刻されたものと言います。

しかし、阿部氏は、現在は、

「本門戒壇の大御本尊様と日禅授与の御本尊とは全く相違しているという事である。よく拝すれば中尊の七字の寸法と全体からの御位置においても、明らかに異なりが存し、また御署名御花押の御文字及びその大きさや御位置、各十界尊形の位置等にも歴然たる相異が存する。そして勿論模写の形跡などは存在しない」（『大白法』九九・一〇・一）と、『河邊メモ』の内容を一蹴しております。

しかし、実際はどうでしょうか。比較を試みたいと思います。

このメモに関連する大石寺と創価学会の争いは、ここでは問題にしません。問題にするのは、大石寺彫刻本尊の原本が日禅授与漫茶羅であるかどうか、この一点です。

また、このことを考えるのに、文献に基づく考証は必要ありません。相貌・文字を比較してみれば事足りるからです。

■日禅授与漫茶羅で特筆すべきこと

さらに、ここから話を進めるに当たり、この日禅授与漫茶羅につき、極めて重要な問題点を申し上げなければなりません。

日禅授与漫茶羅は、『河邊メモ』にあった「初めは北山にあったが北山の誰かが賣に出し、それを応師が何処かで発見して購入」という点は、間違いのないようで、いま大石寺に現存していることが『富士宗学要集』その他書籍の記述から知られます。

ところが、富士門流寺院の大漫茶羅を調査し、その結果を残した第五九代堀日亨氏は、先の日禅授与漫茶羅の記述とは別に『北山本門寺本末の分』として、

「弘安三年太歳庚辰五月九日、比丘日禅に之を授与す、（御判の内に他筆にて）本門寺に懸け万年の重宝たるべし、（伯耆へほうき）漫茶羅と称す」（富要八―二一五頁）

と書き残しております。現に、北山本門寺は、この大漫茶羅を「万年救護へくご」本尊」と呼称し、寺宝として所蔵しています。

つまり、弘安三年五月九日図示の、それも同じ授与者宛の漫茶羅が二幅存在しているということです。しかし、日蓮聖人が、同一日・同一授与者に、二幅の大漫茶羅を図示授与されたとは、まことに考えづらいと言うほかありません。

そこで、可能性として考えられるのは、表層を剥離して御筆を二枚に分けたか、いまひとつは片方が模写であるかです。実否は、その両幅を並べ調査しない限り解明はできません。のちの研究を期待するところです。

■日禅授与漫茶羅との比較

先の大石寺所蔵・伝・俗日増授与漫茶羅と同じく、この二幅の日禅授与漫茶羅も公開されていません。またもや、非公開の壁に阻まれるところですが、幸いにも、北山本門寺蔵の日禅授与漫茶羅の写真を入手することができました。果たして、大石寺と北山本門寺の両漫茶羅が同一相貌であるか否かは、いまの時点では断定できませんが、ここでは同一相貌であると仮定し、北山の日禅授与漫茶羅と比較に供することといたします。

図（007右）が北山所蔵の日禅授与漫茶羅です。大石寺彫刻本尊同様、あまり鮮明ではありませんが、『河邊メモ』に記される題目と花押の比較であれば、十分に事足りります。



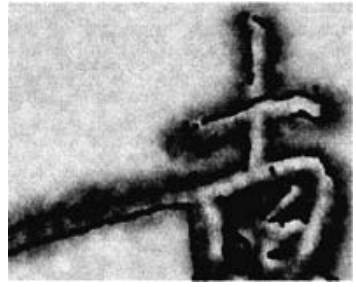
図007右



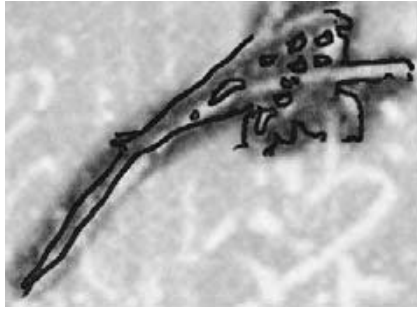
図008

図(008)は彫刻本尊に日禅授与漫荼羅の輪郭を重ねたものです。第九三妙海寺漫荼羅(図003)に彫刻本尊の輪郭を重ねたものと比較してみてください。その差は歴然です。中央題目は驚くほど、一致しています。四大天玉の位置はややずれ、不動愛染と日蓮花押はその位置が異なっています。一字ずつ重ねてみます。

「南」字は各字面の長さ割合はよく一致しており、ご覧のとおり、「十」の部分から全体の字画の割合は一致しています。禅師授与漫荼羅では長く光明(こうみょう)点が伸びますが、彫刻本尊では必ずしも鮮明ではありません。し

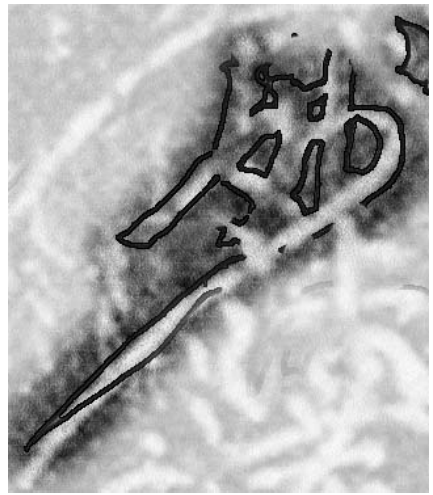


かし筆法として、「口」画から光明点が伸びないことは考えづらく、また、そう記されていないければ、それこそ、この一字は他筆と断定せざるを得ないことになるでしょう。わずかに確認できる線の位置は、ほぼ一致しています。



「無」字も重ねると、以上のように光明点に至るまでほぼ相似しています。傾きに、やや相違がありますが、参考にした写真自体、彫刻本尊は正面右に立って、仰角で撮影、一方、禅師授与漫荼羅は左右端がカールしていることが確認され、これらのひずみを考慮すれば、大きな相違とは認められません。

「妙」字全体は光明点に至るまでよく相似しています。「法」字は妙旁三画の「ノ」とさんずい一、二画が交叉する点からさんずい三画の跳ね上がりまでよく一致して



います。旁は不鮮明でわかりづらいのですが、「蓮」字の草冠が「ム」に入るところなどは一致していません。



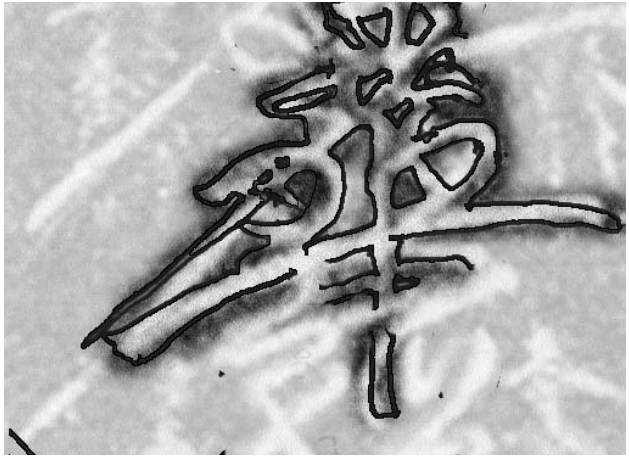
では法旁「土」の二本目の横棒は下に跳ね、禅師授与漫荼羅では止筆となっている相違があります。

「經」の字旁は日蓮聖人の筆法とはやや異なりがあるように見えます。しかし、日禅授与漫荼羅の輪郭を重ねるとその位置はよく一致しております。

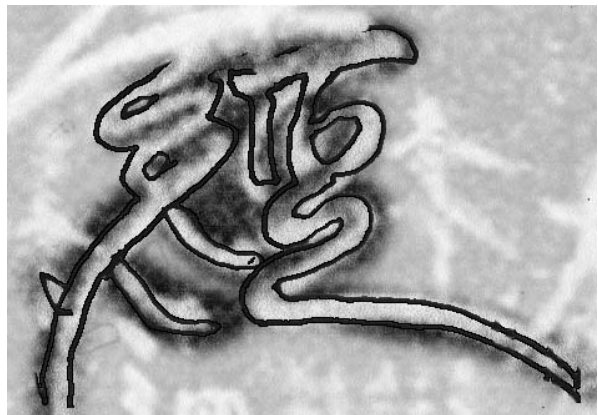
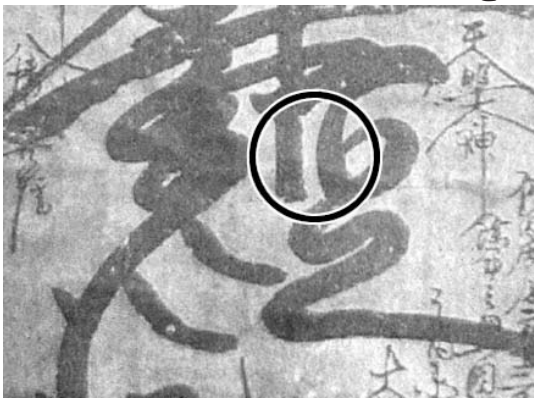
日禅授与漫荼羅の「經」字については特記すべきことがあります。旁が、実は一画不足する極めて特異な書き方がなされていることです。「經」旁二画、すなわち、「ツ」の形を持つ最初の点がなく「ソ」となっています。そして、そこに「華」の縦棒が伸び書かれています。



「蓮」字は光明点に至るまで、
実によく相似しております。



「華」字もほぼ相似形にあると
言ってもよいと思います。



す。これが彫刻本尊
では正規の「ツ」と
なっている点で、異
なっています。

しかし、注目すべ
きことに、日禅授与
漫茶羅の「華」字縦
棒と彫刻本尊「ツ」
様のはじめの点の位
置がほぼ一致してい
るのです。あとか
も、日禅授与漫茶羅
の欠けた一点を補う
如くに一致していま
す。

厳密に言えば、日
禅授与漫茶羅と彫刻
本尊の「經」字はそ
の相貌を異にしてい

ます。しかし、図で見られる通り、その一々の面の長さとは比率、太さ、筆運は実によく一致しています。よく指摘されることですが、彫刻本尊の写真は白い文字が必ずしも明瞭でないために、線をなぞっていると見えます。たしかに、はつきりと見える白線の裏にずれて薄い線が確認できるものが何箇所もあります。「では、元の線は」ということになりましたが、この確認のためには鮮明な彫刻本尊の写真が必要です。大石寺の公開を待たなければなりません。

仮に日禅授与漫荼羅の「經」字が違っているとすれば、彫刻本尊の原図は模写であるというより、臨写であることの意味すると考えられます。

四大天玉は、中央題目との間隔に、日禅授与漫荼羅と彫刻本尊ではズレがあります。しかし、各文字の位置・線・太さに至るまで相似しています。



「大持国天玉」横不動の二点もよく位置が一致しているのがわかります。「大廣目天玉」も、ほぼ一致しますが、「天玉」はややずれています。「大毘沙門天玉」も、ほぼ一致しています。また、「毘」字横の愛染の二点も不動同様一致しま

す。

「大増長天玉」は、特に見づらいなのですが、ほぼ一致しているようです。



「不動」「愛染」は、彫刻本尊のそれは日蓮聖人の筆法と著しく異なっております。しかし、それでも、縦に伸びる線はそれぞれ筆運を同じくしています。



あるいは参考にした写真の下部が歪んでいるために、正しく重ね合わせることができなかつたせいかもしれません。確定は避けることといたします。

■日禅授与漫茶羅模写原本をパッチワーク

日禅授与漫茶羅と彫刻本尊は、全体の各相貌の位置を見ると、中央題目では、ほぼ重なるものの、四大天玉、殊に不動・愛染と日蓮花押の位置はズレています。ところが、いまのように、一字一字を重ね合わせると、よく一致しています。いったい、これをどのように考えればよいのでしょうか。

試みに禅師授与漫茶羅の各文字を、それぞれ彫刻本尊に重ねてみます。図(023)をご覧ください。「百聞は一見にしかず」という思いを懐かれることでしょうか。

一つの技法から類推します。紙幅を原稿にして彫刻をいたすとき、いまだあれば、写真にとって版を作るでしょう



図023

が、昔は籠抜[△]かごぬき[▽]という技法が用いられていました。透けるほどの薄紙を漫茶羅に宛い、文字の輪郭をこれまた細かい筆をもって写し取っていく方法です。

この場合、大きな薄紙が用意できれば、一挙に全体を写し取ることができそうです。しかし、大漫茶羅全体を覆う大きな薄紙を用いなくても、適当な大きさの薄紙で、部分部分を写し取っていくことは可能です。また、そのような場合、元の通りに厳格に配置されないことも起きえるでしょう。

大石寺彫刻本尊の全体が籠抜によって制作されたとは考えづらい面があります。しかし、日禅授与漫茶羅と全体のレイアウトは一致しないけれど、その一文字一文字はよく一致します。ならば、臨模に当たり一字一字を写し取ったあと、板面で再構成したと考えることはできます。もしくは、比較に比した北山蔵と大石寺蔵では少なくともレイアウトではズレがあり、彫刻本尊では大石寺蔵のレイアウトが反映されていると考えることもできるかも知れません。大石寺所蔵日禅授与漫茶羅の公開を待たない限り、その詳細は知ることはできません。大石寺の公開を望みたいと思います。しかしながら、それを待つまでもなく、現段階でも言えることは、日禅授与漫茶羅と、彫刻本尊の題目その他の文字は相似[△]あい[▽]に[▽]ているということですが。

■日禅授与漫茶羅と諸尊も一致するか



図025

日禪授与漫荼羅は、写真が不鮮明で読みとることはなかなか困難なのですが、わかる限りでその座配を記すと、図(026)のようになります。

これを大石寺彫刻本尊の座配と比較すると、この三つは、上述の相違点を除けば、その諸尊勸請座配を同じくしていることとなります。

これはもちろん、柳澤氏がA0版置一枚程に引き延ばして、目を凝らして読みとった大石寺彫刻本尊の座配が正しければ、

ば、という前提ですが、一つの資料にはなるかと存じます。

なお、彫刻本尊の諸尊は、意識的に題目・日蓮花押・四大天王・愛染不動に、掛からないように配置されているように見えます。

その図示の有様は、中央題目・日蓮花押・四大天王を原本とする部分に、その他諸尊を、日禪授与大漫荼羅の座配図を参考にして原図が作られたことを意味するのかも知れません。

以上を総合し、大石寺第二六代日寛が「本門戒壇の大御本尊」と命名した彫刻本尊、すなわち「大石寺所蔵の丸木板彫刻漫荼羅本尊」は、題目・四大天王を日禪授与漫荼羅から籠抜、若しくは臨模して用いたものであると、考えます。また、柳澤氏の座配図を採る限り、他の諸尊は日禪授与漫荼羅を基に配したと考えることができます。また、愛

